

翻訳における学生たちの葛藤

— 三大学連携防災紙芝居多言語化プロジェクトを例に —

植村麻紀子(神田外語大学)・中川正臣(城西国際大学)・澤邊裕子(東北大学)

1. 発表の目的と概要

東日本大震災から13年目の3.11をまもなく迎える。日本国内はもちろん、海外にもその教訓や命の大切さについて伝えていきたい。ことばの活動を通じて世界の防災、減災に貢献していくことが、今、私たちにできることの一つである。

本プロジェクトは、宮城学院女子大学幼児教育専攻の学生と宮城県石巻市の日和幼稚園遺族有志の会が2022年3月に制作した『忘れないよ 小さな命とあの日のこと』という紙芝居を、宮城学院女子大学日本語教育ゼミが原文の日本語を「やさしい日本語」に書き換え(リライト)、城西国際大学日韓交流ゼミが「韓国語」、神田外語大学中日翻訳ゼミが「中国語」に翻訳した上で、それぞれの言語で読み聞かせた音声入りのデジタル紙芝居を制作し、遺族に寄贈するとともに、国内外に発信していくことを目指したものである。本発表では、その翻訳過程において学生たちがどのような葛藤を抱き、それをどう解決したのかについて、話し合いの記録をもとに分析・考察する。

2. 三大学連携防災紙芝居多言語化プロジェクトの流れ

時期	活動内容
2022年4月～8月	<ul style="list-style-type: none"> 日和幼稚園遺族有志の会、代表者の方のお話を聞く。 各大学で翻訳作業を行う。
2022年9月7～8日	<ul style="list-style-type: none"> 三大学で宮城県石巻市の震災遺構見学 翻訳作業に関する学生間の意見交換会
2022年9月～12月	<ul style="list-style-type: none"> 各大学で翻訳の修正 各大学でデジタル紙芝居の作成
2022年12月	<ul style="list-style-type: none"> 三大学合同で進捗状況の報告と修正箇所の検討、統一事項の確認 三大学の学生混合によるプロジェクト成果物を仕上げるグループの立ち上げ
2023年1月	<ul style="list-style-type: none"> 三大学合同で、日和幼稚園遺族有志の会、代表者の方に翻訳内容を確認
2023年2月	<ul style="list-style-type: none"> 三大学合同で完成した動画の視聴とふりかえり 寄贈式で日和幼稚園遺族有志の会に成果物を寄贈 動画の公開と震災伝承交流施設「MEET 門脇」での展示

3. 翻訳・リライトにおける葛藤

3.1 言語・文化的側面

日本の小学校生活を語るのに欠かせない「ランドセル」、「帰りの会」を韓国語や中国語でどう表現したらよいかについて議論した。「ランドセル」は材質こそ違っても「本を入れるリュック」を表すことばが韓国語や中国語にもあるが、「帰りの会」自体がない場合、どう訳すのか。

3.2 事実に基づき、正確に翻訳

「町のマイク」という表現が何度か出てくるが、ここでの「マイク」は「防災無線」のことである。「町」の規模がわからないと正確に翻訳できないため、遺族や紙芝居制作者に確認した。「うちの人は子どもたちの焼けてしまったクレヨンや上靴を大事に大事に抱えました」の「大事に大事に」の解釈の仕方で、中国語では訳語が変わった。「夜になり、なんとか子供たちはバスの外に出ることができました」という一文も、遺体が発見された場所を確認して訳文に反映させた。

3.3 原文(元の紙芝居の日本語)を尊重して訳すか、読み手への伝わりやすさを重視して訳すか

「うちの人」は家族全員を指すのか、保護者だけを指すのか、遺族に確認しながら場面によって訳し分けた中国語、韓国語に対して、「やさしい日本語」では一律に「家族」とした。家族の形態が多様になっている現在、家族を「両親」や「お父さん・お母さん」に限定しなかった「原文への配慮」と「読み手への伝わりやすさ」のどちらを重視すべきか検討した上で、後者を重視したためである。

3.4 慰霊碑の詩

慰霊碑の詩の中には亡くなった5人の子どもの名前の漢字が詠み込まれている。中国語ではそれを活かして翻訳できたが、韓国語では不可能であった。また、詩の最後の一文「あなたの笑顔にまた会いたい」を「やさしい日本語」では「あなたの笑顔に会いたいです。会いたいです」と繰り返すことによって、親たちが子どもを抱きしめたい気持ちを込めた。

4. 命に関わるテーマを扱うことでの葛藤

学生たちは当時小学3、4年生であった。震災を当事者として経験した学生と、テレビ報道などでその光景を見ていた学生、それぞれが抱える想いに違いが見られた。ただ、学生たちは事実を正しく伝えなくてはという責任感や、遺族の想いをどうことばに乗せるのか等、さまざまな葛藤を抱えながら、ことばを一つ一つ丁寧に選び、翻訳を進めていた。被災地に足を運び、自分の目で見て、遺族や現地ガイドの話を聞いて、他の言語で問題になった点を情報共有しながら三大学連携で進めたからこそ、自分では気づけなかった視点を持ち、思考が深まったのだと考える。